様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００９４７

研究課題名（和文）戦後における柳田民俗学の組織的変容に関する基礎的研究ー１９５０年代前半を中心にー

研究課題名（英文）Basic study on organizational transformation of Yanakhita Kunio's folklore after the war

研究代表者
鶴見　太郎（Tsurumi, Taro）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：８０２８８６９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：　１９５０年代前半における地方に向けた柳田民俗学の影響力について、これまで重点的に検討対象としてきた拠点を中心に調査を継続した。ひとつの傾向として、戦前・戦中における「民間伝承の会」の組織活動が進展したことに伴い、次第に鳥取、新潟、信州松本などにおいて、柳田国男の民俗学を受容した郷土史家が在地の郷土研究会を軌道に乗せ、さらなる展開をはかったこと、戦後「日本民俗学会」への改編によって、柳田と交流のない世代の郷土史家の層が次第に形成されてきていることを検証した。学会化によってもたらされた影響は組織面において柳田民俗学そのものを大きく変貌させていった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　日本の民俗学は郷土研究によって支えられてきたことは、周知の事項に属するが、それを組織化するにあたって、全国の民俗事象を比較する上で日本各地に自身の「郷土」を研究する郷土史家が必要とされた。この傾向は戦後もしばらく続く。ただし、「郷土」を離れ、その後長く東京その他都市部の教育・研究機関で活動する事例が目立ってくる。この範疇に属する場合、当該の人物の位置付けは狭義の郷土史家とは異なる要素を持つ。しかも、中央に終始拠点を置くことなく、郷土との往還をしばしば行う事例も見られ、この点において中央の研究者と郷土史家ーという研究史上に見られた関係は次第に後退しているといっていい。

研究成果の概要（英文）： The influence of Yanagida's folklore on rural areas in the early 1950s continued to be investigated, with a focus on the centers that have been the subject of intensive study so far. The study also verified that local historians who accepted Yanagida Kunio's folklore in areas such as Tottori, Niigata, and Matsumoto in Shinshu gradually established local folklore study groups and further developed their activities as the "Society of Folklore" made organizational progress before and during World War II, and that the postwar reorganization into the "Folklore Society of Japan" has gradually created a new generation of local historians who have not had contact with Yanagida. The impact of the academicization of the society has drastically transformed Yanagida Folklore itself in terms of its organization.

研究分野：日本近現代史

キーワード：民間伝承　柳田国男　郷土研究　民間伝承の会　橋浦泰雄

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

研究史上において柳田国男の民俗学は１９３０年代から敗戦後数年にかけて、理論と組織の両面において飛躍的な発展を遂げたとされる。そのもっとも早い段階での理論化への取り組みは、１９３３年9月１４日から自邸で始められた連続講義「民間伝承論」によって本格化する。この時、聴講した瀬川清子、大間知篤三、橋浦泰雄、大藤時彦、杉浦健一など少壮気鋭の研究者がのちに彼の直接の弟子となり、とりわけ組織化について大きな役割を果たした。

さらに二年後に上梓した『郷土生活の研究法』の中で柳田は、郷土研究・民俗学は本来眼前の疑問を解き、広く生活改善を行うことを目的とする学問であるとして、「学問が実用の僕となることを恥としていない」と、かつての農政官僚時代を彷彿とさせる発言を残している。これと前後して１９３４年から３７年にかけて行われた「全国山村生活調査」、ならびにその継続事業「海村調査」は、あらかじめ柳田が選定した僻村に、これも柳田が設けた百項目の質問を付した採集手帖を弟子たち携行して現地に赴き、二十日間程の調査を前後二回ほどに分けて行い、大きな成果を挙げた。言論統制がすすんだ戦時下においても、柳田の民俗学は実証・経験的な思考が可能な学問環境として多くの地方の郷土史家を初めとする人員を引き付け、「民間伝承の会」は飛躍的に会員数を地方末端にまで伸ばした。　研究史的には戦後を迎えて以降も、しばらくこの傾向は続く。しかし１９４７年、「日本民俗学会」への組織的再編は、それまで柳田の民俗学が特色としてきたアマチュアリズムに一定の変化をもたらしたといえる。柳田自身、同会の初代会長に就任したが、名称変更については消極的だったとされる。「学会」という名称は、むしろ自身の組織の担い手となってきた各地の郷土史家による支持を失うという危惧が背後にあったといえる。しかし一方で、一九五〇年、八学連合会に日本民俗学会が参画したことは民俗学が隣接している社会科学と肩を並べて学術調査を行うまでに成長したことを示しており、戦前から強い対抗意識をもって対峙してきた官学アカデミズム史学、或いは競合関係にあった文化人類学、社会学などの隣接分野と共同で大掛かりな調査・研究が可能な環境が得られたことは、柳田にとって好ましいことだった。さらにこれと前後して一九四八年三月、柳田は自邸内に民俗学研究所を設立し、同所を専門的な民俗学者による研究・発信の拠点とした。これまで民間の学であることを矜持とした民俗学の立場を考慮すれば、これは大きな変化だった。

日本民俗学会の第一回年会を行うにあたり、柳田は新規に学会活動を行うにあたって、その課題を述べている。すなわち、従来と同様、地域ごとに分立した傾向にある地方の研究会と、都市部の研究機関の連携をさらに強めて行く必要があること、民俗学が基礎とする資料は地方に散らばっているが、それらを比較総合させ、参加者が検索できるような状態にすることが最優先されること、さらに喫緊の問題として、民俗学がともすれば「オバケ」や「踊り」など、ジャーナリズムから好奇の対象としてみられる可能性を指摘し、それよりも広く生活事象全般の由来を明らかにすることを説いたが、この発言自体、明らかに学会としての体裁を考慮したものだった。

ここにみるように、戦後の柳田民俗学はそれまでの民間の学としての性格を次第に転換させ、趣味的・好事家的な関心よりも、生活の諸相を系統的に調査・分析する専門性を優先する組織へと変容する傾向を持つに到った。それまで発展してきた自身の組織をさらに改編することは、柳田にとって初めて直面する事態でもあった。この事態について、本研究は同時代の基礎資料を吟味しながら、戦前との連続面・不連続面の双方にわたって検証を行った。

２．研究の目的

本研究は戦後、とりわけ１９５０年代前半における柳田国男の民俗学が１９４７年における「民間伝承の会」の「日本民俗学」への発展的解消、「学会」化に伴う人員の増減などによって、どのような変容を遂げたのか考察することを主眼とした。当該期の柳田については個人史的な側面では篤実な研究蓄積がある一方で、組織体としての柳田民俗学に関する事跡の検証は必ずしも十分とはいえない。　日本民俗学において柳田民俗学は強固な体制を築いたこと、同時にそれが地方の研究者の従属をもたらしたことはしばしば指摘されるが、その体制は戦後の変動にあってどのような対応を見せたのか、担い手となった郷土史家・民俗学者の動向も含めて、研究上の検討課題として据えた。

３．研究の方法

当該期の柳田民俗学を組織面から分析する際、本研究はこれまで報告者が適宜、柳田民俗学を考察する上で参考にしてきた「橋浦泰雄関係文書」（以下、「文書」　鳥取県立図書館所蔵）に多くを依拠した。橋浦自身は戦前戦中戦後と柳田に近侍し、『民間伝承』編集長として長らく「民間伝承の会」の運営を支え、戦後は柳田、折口信夫とともに、「日本民俗学会」名誉会員に選出されており、長きにわたり組織としての柳田民俗学の中枢に居た人物である。「文書」もそのことを反映して、全国の郷土史家・民俗学者からの書簡を中心に、名簿、覚書などを収めており、柳田民俗学の組織化を示す基礎的資料としての性格を備えている。

以上を踏まえて、長野県東筑摩郡をはじめとする、戦前から柳田が重点的に開拓して民俗調査と民俗学者育成の拠点とした地域を中心に検討を行った。その際、資料的な対象となったのは、「文書」における戦後の郷土史家からの来信、とりわけ学会運営に関わる資料群だった。その中でも特に１９５０年代における柳田民俗学の組織化について関連性の深い事項を中心に読み解き、１９３０年代と比較対照させながら、考察を行なった。

４．研究成果

（１）「自らをどこに置きなおすか―「日本民俗学講習会」のあとさき―」（大塚英志編『運動としての大衆文化　協働・ファン・文化工作』　水声社　２０２１年　所収　３６５頁～３８４頁）。

柳田民俗学の組織化を考える上で、ひとつの画期となったのが１９３５年７月から８月にかけて行われた「日本民俗学講習会」であることは、ほぼ定説となっている。全国から各郷土を代表する形でこの会に参加した郷土史家・民俗学者たちは、連日講習終了後、行われた座談会において、テーマに応じて各々の郷土に伝承される民俗事象を報告し合い、その中で全国的な組織の設立を望む声が高まったことが、「民間伝承の会」結成への大きな足掛かりとなったことは間違いない。しかしながら、子細に検討する際、各々の郷土と郷土史家との関係は必ずしも双方が直結するものではなかった。郷土から都市部の学校に進学し、卒業後その同じ地域で教員、公務員、その他の職業に就き、当該の土地で民俗学者になった事例がかなりの割合でみられた。彼らは出席者の府県の事情に従い、郷土の代表ではなく、郷土研究を担っている地域から出席した。しかも、こうした地方の教員層が柳田民俗学の組織活動の多くを担っていた。こうした郷土とその研究主体となる郷土史家とのねじれた関係は、

戦後、より大きな形で柳田の民俗学を背後から規定し、「郷土」の位置付けそのものが変容してゆくこととなった。

（２）「戦後の「言葉」をめぐる思索と往還―中野重治の体験と言葉―」（『二十世紀研究』２２号　２０２１年１２月　２１頁～４２頁）

作家・中野重治は戦後、日本語の経験的な論理を大切にすることを様々な局面で説いたが、その淵源には戦時下、柳田国男を訪れその影響下に入ったことが大きく、戦後の柳田もまた、国語・社会科の教科書製作を通して初等教育の段階から論理的な思考を身に付け、公民として育成されていくことを念じていた。政治的には隔たりのある両者だが、戦後における両者の「言葉」をめぐる思索と交流は経験知に裏打ちされており、戦後思想史上重要な位置を占める。

（３）「草創期における日本の民俗学に秘められた力」（『アジア人物史　民族解放の夢』集英社　２０２３年　６８１頁～７０２頁）

柳田国男を中心に折口信夫、宮本常一、渋沢敬三その他、日本民俗学の形成過程を担った群像を連関させながら、戦後に到る日本民俗学の系譜を民間学の視座から叙述した。とりわけ日本民俗学の特色として、問題の立て方の内発性、そして近代以降すでに専門分化しつつあった既存の学問領域を横断する力を秘めていたことに力点を置いた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 鶴見太郎	４．巻 第22号
２．論文標題 戦後の「言葉」をめぐる思索と往還ー中野重治の体験と言葉ー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 二十世紀研究	６．最初と最後の頁 21-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 鶴見太郎
２．発表標題 日本人の実像を求めて旅した 民俗学の祖「柳田国男」
３．学会等名 ゲーテの会（公益法人国際高等研究所）（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 大塚英志	４．発行年 2021年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 483
３．書名 運動としての大衆文化 ： 協働・ファン・文化工作	

１．著者名 成田龍一	４．発行年 2023年
２．出版社 集英社	５．総ページ数 796
３．書名 民族解放の夢　アジア人物史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関